

空知の概要



【沿革】

空知は北海道の母なる川・石狩川の恵みと石炭の発見、原始の森に挑んだ先人のフロンティア精神にその礎があります。

明治元年、石狩の木村吉太郎氏が、小樽本願寺の建立材を求めて幌内近傍に入地、伐採中、幌内炭層を発見、石炭鉱業発展の端緒となりました。

さらに、石炭の積み出しのために建設された鉄道は、北海道の発展とともに、道央と道東、道北を結ぶ大動脈となり、交通の要衝としても発展してきました。

【現況】

昭和35年のピーク時には約81万2千人の人口がいましたが、昭和30年代後半からの石炭産業の斜陽化などにより、その後も減少し続け、現在は、約27万5千人となっています。

かつて、日本の近代化を支えた石炭産業は文化として、その炭鉱遺産は日本遺産～北の産業革命「炭鉄港」として、現在はこれらを活用した地域づくりが行われています。

農業では、稲作の作付面積は全道の44%を占めるわが国を代表する稲作の中核地帯であります。また、農業体験などのグリーンツーリズムでは道内の最先進地域であり、地元の農産物を使ったファームレストラン、直売所、空知産ワインなど、道内有数の農業地帯として、農業との結びつきを強く意識した地域振興が進められています。

【地勢】

北海道の中央部やや西方に位置し、上川・留萌・石狩・胆振の各(総合)振興局と境界を接しています。東西約70km、南北約130kmに及ぶ広大な内陸地帯で、中央を石狩川が縦走し、南西部にかけて豊かな石狩平野が広がっています。総面積は、約5,792km²で、全道面積の約6.9%を占めています。

【気候】

南北に細長い内陸地帯のため、南部は比較的温暖、北部は低温で寒暖の差が大きいのが特徴です。

降水量は、夏から秋にかけて比較的多く、季節風の影響を受けて、冬の降雪量も多くなっています